

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	教育学	専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・教育学専攻・博士後期課程 2年		蓮見絵里 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学部教育学科・教授		石黒広昭 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題名	ジャズピアノプレーヤーの発達過程の研究 —音と音への意味づけを手がかりとして—						
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
研究期間	2013 年度						
研究経費	(支出金額) 200千円		／ (採択金額)		200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

演奏の習得について、先行研究では熟達者に特有の知識や身体動作が獲得されることが指摘されるとともに、学習場面での発話、身体動作などの効果について検討されてきた。演奏の学習場面では、学習者や指導者は音を使用の仕方を学習し、また音により学習を支援していると考えられるが、学習場面で音がどのように使用され、そのことで何を習得されるのかについては十分に議論されてこなかった。そこで演奏の学習が行われる場面において、学習者と支援者はどのように音を使用し、支援あるいは学習するのかをジャズピアノのレッスン場面を分析することで検討した。分析の結果、指導者が音により積極的に支援すること、曲のなかである部分を取り出して重点的に演奏することが示唆されたが、今後はそのような場面での微視的分析が課題となる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[発達] [ピアノレッスン] [音の分析]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

演奏の習得に関する従来の研究では、熟達者と初心者を比較したうえで、熟達するにつれてスキーマが獲得される(大浦,1998)、あるいは身体の動作が変化するということが指摘されてきているが、それらがどのような方法で獲得されるのかについては、十分な説明がされていない。演奏の学習場面については、演奏者自身のインタビュー、評定、発話、身体動作などの分析によって検証されてきている。とくに、西阪(2008)は、演奏の学習の達成とそれに対する組織化を、教師、子ども、母親の発言、視線、身体と道具の配置というような客観的に観察可能な表現のデザインとその配置との関係を記述するとともに、記述の際に「本人にとって可能な記述・表現」によって、活動の参加者にとっての意味を損なうことなく取り出すということを示したという点で、学習場面の分析の新たな視点を提案しているといえるだろう。しかし、そのような視点で学習場面での音の分析は十分には行われてはこなかった。また、音の知覚学習を明らかにするために、実験のなかで被験者が音高の知覚学習を行っているものがある(Werner,1946; Leont'ev,1967)。このような実験は学習方法の有効性について明らかにする可能性を持っているが、そのためには実際の演奏の学習場面でどのような課題が設定されているのかを考慮に入れたうえで実験を組織することが必要となるだろう。

これらの従来の研究から、演奏の学習場面でどのような課題が設定される中で、音がどのように使用され、それによって学習者が何を学習したのかを明らかにすることが、演奏の習得の研究での課題であるといえる。

Leont'ev が述べた、社会一歴史的発展の成果の習得である「獲得 appropriation」の過程での人間の発達の特徴に基づいて考えるのであれば、演奏の習得とは、参加しようとする活動でふさわしいとされるような音の使い方を知ることと言い換えることができるだろう。演奏の学習場面の一つであるレッスンでは、学習者は活動に参加する指導者とともに、組織された環境を使いながら、社会一歴史的な道具である音の意味の交渉を行い、音の使い方そして意味を変化させる。そして、活動に参加する他者が、音の意味の変化に対して、ふさわしいと評価する。演奏の学習場面の課題が、ある文化での音の使い方を知ることであるならば、そこでの音の使われ方を明らかにすることが、演奏の習得の仕組みを知るうえで重要であると考えられる。

そこで本研究では、演奏の学習場面において、指導者と学習者が、どのように音の使い方を学習者を支援し、その支援の中で学習者はどのようにして音の使い方を知りながら習得していくのかを明らかにする。

本研究ではジャズピアノのレッスン場面を研究対象として分析を行う。ジャズピアノを演奏するとき、演奏の手掛かりとして使用される楽譜に書かれている音符やコードネームに示されている音をそのまま弾いたとしても「ふさわしい音」として評価されることはない。したがって、楽譜を手掛かりにふさわしい音の使用をするために、他者との意味の交渉が頻繁に行われることが予想される。そのような点で、ジャズピアノのレッスン場面は本研究の問いを明らかにするためにふさわしい研究対象であると考えられる。

本研究では、学習者と指導者によるマンツーマンのジャズピアノのレッスンを分析対象とした。レッスンは月二回、1回は約 50 分間行われた。2012 年 5 月から 2013 年 10 月までのレッスンをビデオ撮影により記録した。

ビデオデータをもとに、ピアノあるいは歌により演奏されているとみなされる部分について記述し分析を行った。全体での相互行為の傾向を明らかにするために、レッスンで誰が曲のどの小節を演奏したのかを記述し、分析を行った。学習者と指導者がそれぞれ 1 人で音を出す独奏、2 人で曲の同じ個所を演奏する二重奏の 3 種類に分類するとともに、練習している曲のどの小節を演奏しているのかを記述した。

研究成果の概要 つづき

これまでに 2012 年 5 月から 10 月までの 10 回分のレッスン場面の分析が行われた。練習された曲は、5 か月間で 8 曲が演奏され、撮影以前から取り組んでいた 3 曲は除外し、5 曲について分析を行った。

分析の結果、レッスンでの音による環境の組織化のされ方として、5 つの傾向が明らかとなった。

まず 1 つ目に、指導者の独奏が行われた回数が学習者の独奏や二重奏と比べて多かった。このことから、指導者が音を出すことで学習者に対して積極的に援助をしようとしていることが示唆される。この結果は 5 曲すべてで見られたことから、5 曲が練習された間でのレッスンの傾向であることが示唆される。

2 つ目に、曲ごとに演奏回数にばらつきが見られた。演奏回数が多いということはそれだけ調整が必要であるということが考えられるが、曲により調整が必要な度合いが異なっていたことが示唆される。

3 つ目に、曲ごとに二重奏が何小節継続したのかをみたところ、16 小節以下の連続が 60% 以上を占め、17~32 小節は 0~15%、33~48 小節は 0~10%、49~62 小節は 0~26% となった。いずれの曲も 1 曲が 32 小節以上であることから、レッスンでは、1 曲より半分以下の単位で取り出して二重奏を演奏することが多いことが示された。

4 つ目に、独奏の小節数を見たところ、指導者も学習者も連続して演奏する小節は 8 小節以下が 8 割以上を占めた。二重奏の場合は、16 小節以下の割合が多かったことも考慮に入れると、レッスンでは二重奏と独奏いずれも 1 曲より半分以下の単位で取り出して演奏を行うことが多いことが示された。

5 つ目に、独奏と二重奏合わせて 300 回以上行われた 2 曲を対象に、小節ごとの演奏回数を見たところ、2 曲とも小節により演奏回数にばらつきが見られた。さらに、1 曲ずつをレッスンの日にちで分け、小節ごとの演奏回数をみたところ、レッスンの日にちにより演奏回数が一番多い小節が異なっていることが示された。これらのことから、曲全体をまんべんなく演奏するというよりは、ある部分を重点的に演奏していること、そして重点的に演奏する部分がレッスンの日により異なることが示唆される。

これらのことから、指導者が音を出すことにより積極的に支援すること、曲のなかである部分を取り出して重点的に演奏することにより、レッスンという学習環境が組織されていることが示唆される。

しかしながら、指導者がどのような音を出して学習者の支援をしているのか、また学習者がその中でどのように音の使い方を変化させていくのかは、現在の分析結果からはわからない。今後の課題として、演奏されている回数が多い曲や小節に焦点を当て、演奏者がどのような音をどのように配置したのかを記述することによって、音の意味がどのように学習されるのかについて微視的な分析を行うことが必要となる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)